

「熊野」

平清盛の二男の平宗盛（ワキ）と
その従者（ワキツレ）が
現れます。

彼が寵愛する
遠江・池田宿の
熊野は、母の病氣のため
暇をいまして、申し出て
花見に伴うため、
彼女を都へ
引き止めています。



ある日、池田宿の
身内の朝顔（ツレ）
病氣の具合が、
よくないため、
熊野を迎え、
やがて
きます。



面・小面

朝顔（ツレ）がやってきましたと聞いて、
熊野（シテ）が登場します。



シテ



面・孫次郎

朝顔が持つて来た、
熊野の手紙を読んで、
宗盛は、
暇をいまして、
しとをう

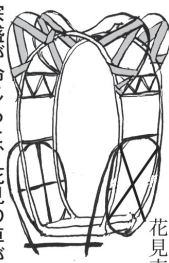


熊野は、
宗盛の、
ゆき、
母の容態が
悪いことを
伝えた、
手紙を
見せました。



手紙には、武帝と甘夫人や、玄宗と楊貴妃、釈迦如来も死による別れを免れることができなかったことや、在原業平が老母とやり取りした「老ひぬれば、さらぬ別れのありといへば、いよいよ見まほしき君かな、千代もと祈る、人の子のため」の歌を引きながら、死ぬ前に子に一目会いたい母の思いが綴られていました。

しかし宗盛は、暇をい
し、清水寺の
清見を
伴女を
にうこと



花見車

宗盛が命じると、花見の車が
出されます。

浮かない心のまま花見車に乗り、
宗盛の邸から賀茂川のほとりを
通り、清水寺に向かう熊野。
華やかな風情です。



清水寺に着くと、
熊野は御堂で、
母のため祈りを
捧げます。



花見の酒宴は、はじまりです。
熊野は、周囲の風物を眺めなが
ら、美しい花の美しさをたた
え、



熊野が宗盛に酌をする、
宗盛は舞の扇を開いたま
ま、舞に酌を命じます。
舞が始まるにつれて、
花が降りてきて、
散らします。



今回は、
「三段の舞」。
の小書がつきます。

熊野は舞を途中でやめると、
短冊を取り出し、母を思う歌を
書きます。
感動した宗盛は、熊野に帰郷を
許します。
今回は、
「短冊の留」の
小書がついて
います。



熊野はこれでも観音の功德と
喜び、都に名残りを
惜しみ、
帰国へ
いきます。

